

連載103

内海善雄の
(ITU元事務総局長)

やぶ睨み
「ネット社会」論

オウム真理教の狂気は 決して特別なものではない

面は否定できない。しかし、殺人ほどの重罪ではないが、「どうしてこの人たちが……」と理解したいエリート集団の犯罪行為はいくらでも例がある。オウム事件を、「原因の解明ができてない」と、あたかも他の多くの犯罪とはまったく異質のものだと決めつけてよいものだろうか。

集団主義と集団浅慮

第一に、「集団主義」という思想・信条である。個人の利益よりは集団の利益を重んじ、個人を犠牲にしても集団のために尽くすという考え方で、即座に想起されるのは戦前の日本社会である。

人間たれしも、多かれ少なかれ、このような傾向があることは否定できない。集団主義の反対は「個人主義」だが、個人主義の傾向が強いとされる西欧社会でも、職場の日常の行動の中に集団主義的な行動を見ることが多い。例えば病気でも仕事を優先したり、意に反しても組合の方針に従うというような例である。そして人々は集団の利益のために個人を犠牲にした者を美化し敬う。

その集団が違法なことを行い始めた時、個人が、そのことが不正や犯罪であるということとは分かっているが、反対することはなかなか難しい。文書改ざんに反対した近畿財務局

オウム真理教事件の死刑囚十三人全員の刑が執行された。事件からすでに二十数年を経て、人々の記憶は風化していたが、刑の執行は事件を思い起こさせ、改めて人間の本性を考えさせたとと思う。

エリート集団による犯罪行為

事件の概要に加えて、外界とコミュニケーションを一切取ろうとしなかった麻原彰晃（松本智津夫）や、弟子の多くが懺悔していることなど、死刑囚の獄中での様子が報道され、さまざまな識者の意見がメディアに登場したが、その多くは「原因の解明を行うためにも死刑の執行は残念だ」というものであった。確かに、なぜ多くの若者が入信し、また、高学歴のエリートたちが教団幹部となって殺人まで行う犯罪に走ったのか、理解に苦しむ

最近であれば、東芝やオリンパスの不正経理、神戸製鋼のデータ改ざん、自動車各社の検査データのねつ造等々のいわゆる企業犯罪、また、財務省の文書改ざん、文科省の天下りなどの不祥事は、犯罪や違法行為を行うことが普通は想定されない超エリートたちが、平気で犯罪行為に走ったという点では、皆、オウム真理教事件と同じ性格のものであるとと思う。

これらのエリートの集団による犯罪は、諸外国でも数多く見受けられる。ナチをはじめ、カンボジアのポルポト政権、ISなどによる虐殺行為、エンロン、ワールドコム、VWなど超一流企業の粉飾決算やデータねつ造など、枚挙にいとまがない。

なぜ、おおよそ犯罪とは縁のなかつたエリートたちが、集団になるとこのような行為を平

の職員は、自ら命を絶つほど苦しめられたが、よほどの正義感と勇気があったに違いない。ご冥福を心からお祈りしたい。

では、なぜ集団が違法なことを始めるのか。それは、「集団浅慮」という現象が起きたと考えれば、理解しやすい。

心理学者アービング・ジャニスは米政府の意思決定上の大失敗事例を分析した結果、「人間が集団で物事を決定する時、一人で決断するよりも、大失敗する危険性が高くなる」という結論を導き出し、「集団浅慮」という概念を提唱した。「三人寄れば文殊の知恵」の真逆である。具体的には、結束力のあるエリート集団には次の八症状が表れるという。

症状1 優秀なメンバーが集まっていることに酔い、無敵だと思ってしまうようになり、楽観的になる

症状2 自分たちは道徳的であるという信念



エリート集団がなぜ? (写真/朝日新聞社)

が広がる

症状3 決定を合理的なものと思ひ込み、周囲からの助言を無視する

症状4 競争相手の弱点を過大視し、能力を過小評価する

症状5 集団の決定に異論をとなくなるメンバーに圧力がかかる

症状6 集団の意見から外れないように、自分で自分をコントロールする

症状7 過半数にすぎない意見であっても、全会一致であると思ひ込む

症状8 自分たちに都合の悪い情報を遮断してしまふ

どの症状も、常日頃、会社などの組織の中で身近に経験する現象である。

権威と慣れに弱い人格

さらに、「権威主義的パーソナリティ」という個人や社会の性向も理解の助けになる。フアシズムを台頭させたドイツの中産階級を分析したフロムや、アメリカの社会学者たちは、彼らは権威ある者への絶対的服従と、自己より弱者に対する攻撃的性格、集団への極端な帰属意識を持っていたと分析し、そのような傾向を「権威主義的パーソナリティ」と命名した。彼らは善か悪か、敵か味方かという二価値判断におちいりやすく、紋切り型のステレオタイプであり、強い者や権威に従う単純な思考

が目立つという。周囲を見渡せば、確かにこのような傾向が強い人や集団が日本でも目につく。

そして、集団犯罪と特に関係しているわけではないが、「慣れ」ということも重要な要素ではないだろうか。見過ごされたり、許された違法行為に慣れて、だんだんとエスカレーターしていく姿は万国共通の人間の性である。むしろ、現状に慣れて次のステップを許容することは、生物すべてが持つ生命維持のための機能だとも言える。

このように見ていくと、世間を震撼させたオウム真理教事件の狂気の種は、我々人間に本来的に内在するものであり、ある時は企業犯罪となり、ある時は役所の不祥事となり、稀ではあるがオウムのような凶悪事件にも化けるように思える。八月になるたびに思い起こされる特攻攻撃などの戦前・戦中の日本軍の蛮行なども、まったく同様に理解できる。世界を相手に戦争をするという狂気自体、オウムとまったく違いがないではないか。



内海善雄(うつみ よしお)

1942年香川県高松市生まれ。東大法政大学卒業。66年郵政省(現な総務省)入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合(ITU)事務局長就任。通信・電力・自動車関係企業や各種団体の役員、大学教授などを歴任。IEEE名誉会員。